

牧師室から(2021.4.18)

昨日(15日)昼に、アイネが息を引き取った。先程火葬して戻ってきたが、言いようがなく淋しい。昨夏より骨肉腫との闘病生活で、色々大変であったが、いざいなくなると大きな喪失感が襲ってくる。アイネを通して多くの喜びやまた悲しみを知り、人生に深みを与えてくれたことを感謝している。

ところが聖書においては、犬は一貫して軽蔑される生き物である。例えば「犬は、自分の吐いた所へ戻ってくる」(箴言 26:11, IIペトロ 2:22)、「神聖なものを犬に与えてはならず」(マタイ 7:6)、「あの犬どもに注意なさい」(フィリピ 3:2)など枚挙に暇がない。ただ続編のトビト記に、トビトの息子トビアが旅をするときに犬を連れて行くことが記されているのが唯一の慰めである。因みに聖書以外でも「シニカルな笑い」などというが、これも語源は犬である。

しかしずっと昔から、犬は人間に寄り添って飼われてきた特別の動物である。ただ単に愛玩として気持ちが癒されるというだけでなく、実際に色々人間の生活に役に立ってきたこともある。犬嫌いの方にとっては申し訳ないが、私ども夫婦は犬最良である。家族の一員として人間に準ずる地位を与えてきた。だから今は、アイネが犬であるのにもかかわらず、私の家族が減った感じがする。

思ってみれば、教会の多くの方々には、とても可愛がっていただいた。そのためか、本当に人好きな犬であった。犬の分際で教会の発行物に載ったり、教会員や近所の方々からも愛されたのは、アイネは「教会の犬」として十分務めを果たした恵みの犬生であったと思う。世間では、子どもや孫を自慢すると鼻につくと言われるが、ペット自慢は大目に見られていると私は認識している。という訳でどうぞ今回のエッセイもそれなりにご容赦頂ければ何よりである。

(鈴木淳一牧師)